

俺、結構ガチで幻想郷支配したからカオスにしていくわ

タケノコ委員長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

重度のオタクである私は、田舎暮らしをしていた。そこに現れる謎の光、向かってみると、幻想郷への入り口だった！そんなこんなで幻想郷での役割を言い渡されると――

「幻想郷を支配して、たくさんのアニメキャラを連れ込み、町をカオスにしてください。」

そう言われた私は、大混乱！そもそも幻想郷を支配することも大変なのに――！たくさんのアニメキャラを連れ込むのはもつと大変だああああ!!ああああああ!!(発狂)。果たして、私は無事元の世界に帰れることができるのか?!?

皆さん、おはこんばんちわ！タケノコ委員長です！今回のストーリーは、自ら幻想郷に行き、とりあえずアニメキャラを召喚っ！していく物語です！もし召喚してほしいキャラがいましたら、○○召喚してほしい！と教えて頂いたら、出来るだけの努力はします(▽▽)この物語は、1週間に1度の投稿、文字数は8000字付近を予定します！それではゆっくりして行ってね!!!

「こちらでは、転生したらチルノ様の世話をする事になった件について(´o´)／で取り込めなさそうなことを一気に出していきますw。上の小説の方もよろしくお願いします(´▽´)」

目次

Stage 1. 謎山に現れる美しき光。我が心はオタクに包まれて	1
Stage 2. 伸び伸びしている幻想郷。今は亡きウイズストキル	14
ターとは!?	14

Stage 1. 謎山に現れる美しき光。我が心はオタクに包まれて――

「ワハハハハハハ!!!遂にこのゲームの支配者になったぞ!!!」

私はタケノコ委員長、重度のオタクである。

「アハハハハハハ!!!楽しいなああああ!!!」

そう、今やってるゲームは、今学校で流行ってるグラウンドファイアという私がつったアプリだ。

「そうそう、このコンビを作っておいたんだ!これでよし!しゃあ!1戦行くか!!!」

このゲームは、対戦すればするほどキャラが強くなって、強くなったキャラで世界一を狙う頭脳戦である。

「俺がつたゲーム、遂に100万ダウンロード突破か!。嬉しいな!。開始2週間!ウマウマ(☆▽☆)」

そんなことをしていると――。

「はっ!!!ん?夢か――。なんか何でも良いから何かを支配してみたいな!。何で夢だけなんだよ――!」

私は夢を見ていた。とても痛々しい夢だ。重度のオタクしか見ることのない夢だ。

「はあ、忙しいな!。いくら日曜とはいえ宿題多すぎだろ――!」

夢の中は楽しみだらけ、現実の中は宿題だらけ。それが日常なのだ。

「くっそ!漢字とかまじ時間かかるし!超能力ほしーい!!!!!!」

とりあえず超能力を求める私であった。

「その超能力でアニメキャラ引きずり込んでそれぞれで戦わせたり、全員で運動会――ウへへへへ!!!」

うん!皆さん、気づきましたね!もう私はダメですわ!!!

「はっは!、幸せ!こんなに楽しい妄想が他にあるかよ!。クラスメートも楽しい妄想すれば良いのに――!」

そうして妄想だけをしていると、まさかの事態が起きた。

「あ、ヤバイ、もう2時間たった。ああああああああ!!!まだ漢字1つしか書いてない!!!終わった——。」

現実逃避する私、そこに待ち構えるのは、悪夢の現実である。

「あーあ、なんか別の世界行きたいなー。こんな世界より楽しいところあるじゃん。」

面倒になった私は、別の世界に行きたくなる。まあ、普通は無理ゲー過ぎる話だが——。

「さてと、漢字やんなきゃ！妄想は一旦ストップ!!!」

そうして、妄想を一時終わらせて、宿題を進める私であったが、人間的に残念な私であるため、いつも何か見落としをする人であった。

「眠くなってきた。けど、あと少しで漢字、数学テキスト、理科の実験結果シート全て書き終わるわー。マジ長過ぎー!」

実は、まだ宿題は残っていた。そう、音楽の学習プリントであった。

「折角の日曜なのに、宿題に終わられて遊べなかったじゃん!」

そういう私は、最初妄想をしていたじゃん!

「夕飯食べて風呂入って寝よ。いや、その前になんか歌でも歌いたいな。カラオケはウチの近くないし、不便だなー。」

実は、うちは田舎の為、近くに美味しい店や、娯楽施設などは殆んどない。唯一あるものを言うとする、ボーリング場である。

「歌いたーい。歌いたーい。楽しいカラオケ待っているー(△▽△)」

何やら歌い始めたようだ。

「はあ、つまんねえ、友達も少ないし、最悪だ。」

一人ぼつちの私、遠くに行き、カラオケ行くのも一人、お昼も一人、更には、勉強も全て一人でやっていた。

「都会行きたいなー。」

なんとなく話す都会が良かった。でも、おそらく都会に住んでる人は田舎が良かった。自分の生活を否定する手段である。

「こうしていてもしょうがない。さっさと夕飯作るか。」

既に一人で暮らしている私は、全て一人でやっていかななくてはいけない。その辛さは想像しがたいものだ。

しばらくして、夕飯を食べて、風呂からあがった。

「さて、明日からの学校に備えて、寝るか。」

何かをしていたら、明日に響くと考えて、とりあえずしつかり寝ることにした。いつも日曜はこんな感じになっている。

「——。もつと楽しい日々だったらな。」

翌日

「ふわああ——あれ？いつもより1時間も早く起きちゃった。何でこうなるのかな——ついてないな。」

イライラ気味の私だった。とりあえずテレビをつけることにした。

「ええっと、テレビのリモコンつと、ほい！」

テレビは無反応だった。

「はあーリモコンの電池が切れたし——最悪だ。今電池予備がねえよ！」

諦めた私は、一時間を有効に使い、授業の準備をした。

「今日の日程はなんだろうな。よっしゃー！1時間目から体育だ！ひやは——！」

楽しんでいられるのも1時間目を見ている間だけだった。なぜなら、天災は忘れた頃にやって来るからだ。

「2時間目く。音楽——。音楽？あああああ!!!学習プリント忘れてたあああ!!!おまずいおまずい!!!——あ、終わった。」

学習プリントは、どんなに頑張っても30分はかかる量だった。

「いや、まだある。素早く学校行って、授業が始まるまでに終わらせる!!!」

宿題忘れた生徒がやる、最終手段である。もちろん、これをやるのは良くはないことなのだが。

「よっしゃー学校にダ——ー——ッシュー！」

いつものことである。走って走って、学校についた。

「さてー勉強しよつとー！」

これもまた、いつものことである。

「そういえば、この学校って人数すくないよな。ウチの学年で19人って、やっぱり田舎はこういうものか。」

後ろの席の2人が、何か話している。

「ねえ、知ってる？最近近くの山で変な光が突然現れるらしいよ！」
「なにそれ、聞いたことない！詳しく教えて！」

「ええつと、実は午後8時ちょうどに山に光が現れるの、それもごくまれにー。」

「午後8時ね、よし、今日行ってみよう！」

「違うんだよ、それが——。100日に1度しか現れないんだよ！」

「えええ！なんだよ期待させやがってー！」

「アハハ、失礼。まあ、結構珍しい現象で、これを間近で見たものは、この世界に帰ってこれなくなるの。」

「それってさ？この世界とバイバイ！することなの？」

「そうみたい。」

「げっ！行きたくないよー！」

「まあ、そうなるよね。」

その話を、私はこっそり聞いていた。

「へえ、別世界にでも行くのかな？マジで面白そうではないかあ！」

軽い気持ちで考える私、それがいつ起こるかは分からないが。

「よし、今夜から8時は毎日そこだなー！」

更には、その光の中に入ろうと考えたのである。一方、別の所の話では。

「ねえねえ、前に起きた山の事件知ってる？」

「え？なにになに？」

「3日前かな？山に突然光が現れて、5分ほどで消えたんだけど、あの2800メートルの山。」

「あー、謎山ね。」

「あ、そうそう！謎山ってその名の通り謎が多くて、伝説上、満月の夜に時々光が出るらしいの。」

「満月の夜の光？なにそれ！面白そー！」

男子2人組だけでなく、女子2人組もわけわからないことを話し始めた。

「ねえねえ、そこに行ってみようよ！」

「それがね、2800メートルの山だし、まあ、行くなら満月の夜だけ

かな?でも、いつ光るかは私はわからない。」

「あー、確かに、時間がわからないからねー。」

このことを聞いた私は、いつどこで何時に起こるか、全て理解した。「満月の夜時々、謎山頂上付近にて8時——か。」

しばらく考えたあと、やはり行きたいと思い、次の満月の夜を待つことにした。

キーン コーン カーン コーン

学校のチャイムが鳴る。

「あああああああ!!!忘れてたあああああ!!!音楽の学習プリント!!!」

謎山の光の話を聞いていたら、音楽の学習プリントを忘れていた。

「まあ、1つ楽しそうな情報をゲットしたから良いけどね!」

私は、夢物語に釣られて、早速廊下にある窓から謎山を見ていた。それはとても高く、登るのは苦労しそうだった。

「はあ、これはかなり大変だなー。次の満月はいつだっけ。」

たまたま理科の先生が通りかかる。

「すいませーん。次の満月っていつでしたっけ?」

「ええっと、24日後かな?」

「ありがとうございます!」

「なんか満月に興味でも持ったの?」

「いえ、でもなんとなくクラスで満月の話をしている人がいたので、気になってしまって——。」

「そうなの、そうやって身近なことを疑問に持つのは良いことだね!」
「あ、ありがとうございます。」

3日前の事件、おそらく満月である。3日前は気温も低く、山に登るのは困難だっただろう。

「24日後——。おっと、音楽の宿題意外と短いぞ、すぐに終わりそうだ——!」

そうして、授業に入った。4時間目、社会の先生が、またもや謎山について語り始めた。

「謎山事件、知ってる?」

「あ、急に光るんですよね！」

「あれね、実際にその光に入るとどうなるかは分からないし、まだ誰も入ったことはないけど、ニュースに取り上げるべきとは思うんだよね。」

「先生、そしたらここホラースポットになりますよ！そんなのは嫌ですよー！」

「多分、噴火の前兆とかじゃないかな？」

「えー、それは嫌ですよ！私噴火嫌いでもん！」

「まあ、そりやそうだよね。」

社会の先生は、しばらく謎山について話してたら、こんなことも話した。

「実は、謎山には色んな伝説があつてね。山の頂上に登れた人は本当に2、3人なの。」

「どういうことですか？」

「足場が悪い、途中の坂がきつすぎる。更には、蛇が襲ってくるとかいう話があつて。」

「蛇が襲うんですか？逃げれば良いだけじゃないですか！」

「その蛇を見たものは、もし逃げ切ったとしても、3日以内に命を落とすとか——。」

「やだやだやーだ！怖い話嫌い！」

「あー、女子さん達失礼。でも、あの山には、関わらない方がええよ。謎山は名前の通り謎だらけだから——。」

ホラースポットに認定されそうな山だった。

「さて、授業やるよー。」

社会の先生のこの一言で、また授業が始まった。

「ふう、光——か。よく分からないけど。」

私は、その光が現れる全ての条件をいち早くゲットした。もちろん、クラスメートに言うわけない。

「24日後、午後8時、満月の夜に、謎山の頂上。そこに行けば、ホラースポット制覇者になるぞー！」

24日、短くて長い時である。しばらくして学校が終わった後、一

部のクラスメートで謎山の近くまで行くことになった。

「よっしゃー！謎山行くかー！」

私は、それには誘われなかった。家に帰って、勉強しようとした。

「ふう、やっと学校終わったー。一日って意外と長いなー。そもそも、24日後って何曜日だし——。」

木曜日である。

「うわあ、ふつーに学校——あ！この日は確か学校が創立されて15周年記念の日だ！だから授業はなくてすぐに終わる！」

15周年記念、1時間で終わる記念式典をして、そのまま終了となる。

「というか、謎山ってどこから登れば良いのかな——。」

謎山を今まで登ろうとしたことがあるだろうか——。否。それはない。2800メートルなど、体力的に無理である。

「そうだなー。まあ、行くななら早めに行かなきゃ。ただ、この場所が既に150メートル付近だし、まあ良いんだけどね。」

家と学校、謎山は近くにあり、家と学校が300メートル、家と謎山が600メートル程であった。

「24日後——か。」

眩く一言、緊張の心を表した。

「さて——今度こそ勉強するか。」

そのまま勉強を始めていった。

「はあ、昨日より宿題少なくて助かるー。」

1時間ほどで宿題を終わらせた。ゆっくり頑張った。

「うん！オツケー。眠いから寝よーつと！」

とりあえず、しっかり寝て、明日に備えた。

光の出現まで、後23日になった。

「ふわああ。ゆっくり寝れたー。」

朝、午前5時のことである。外は暗い雲に包まれていた。

「雨、降りそうだな。傘持たなきゃ。」

謎山に入る悪夢の兆し、そこから雷が鳴り響いていた。

「うわあ、雷が酷いな——まあ、これもこれで運命なのかな——？」

うん。まあ、とりあえず——朝食食べるか！」

一人でゆつくり朝食食べて、シャワー浴びて、ちょうど良い時間になる。

「まあ、今日もゆつくり勉強しに行くか！」

学校は毎日あるため、しつかり行かなくてはいけない。

「光——俺は午後8時——その光の中にいるのか。なんだろう。もしかしたら、この世界の王者になって——グヘヘヘ——！」
タケノコが王者になる↓世界が滅びる↓俺が滅びる↓あの世行きである。

「あ、ダメか——。」

そんなこんなしてるうちに、光まで残り10日になる。

「んっん——。後10日か——。」

この日もいつものように歩く。が、空から白い物が降ってくる。今年初の雪だ。その雪はどんどん強くなっていく。

「寒い——この辺寒い——。」

私が住んでるこの町は、とてつもない寒さと共に、闇のように光が通らない別世界のような町だ。

「今日の気温は、？2℃。そりゃ、雪になるか——まあ、この町、天気が荒れやすいことで有名とされてるからな。」

私は、白い絨毯の上を歩く。もちろんのこと、雪はおさまらない。むしろ強くなる一方だ。

「——。雪、止まないかな——。流石に雪は雪でも強すぎだよ——。」

天気は心で対処するものではなく、他の何かで対処するものだ。

「はあ、はあ、——う。」

吐息と共に現れる白く小さな雲。それは、これからやって来る光が不思議なことというものを指し示していたようだった。

時は過ぎていき、残り1日となった。この日は晴天に恵まれた。

「うん、いいね——。」

実は、この町では、晴れる日の方が少ない。晴れたとしても、もし晴れたとしても、残念なことに光はごくわずかである。

「さあ、いよいよ明日だ。けど、どうやって登れば良いのやら、そんなのわかるわけない——そうに決まってる！」

この日は水曜日であった。

「ああ、闇よ、光になってくれ。」

無情にも時は過ぎ、まだ何も決めてないまま、その日が来た。木曜日、天気は曇りだが、今にも雷が落ちそうだった。

「へえ、昨日よりも暑い。うわあ、やっぱり天気荒れやすいなー。」

一人で暮らしてる私にとって風邪は天敵であった。

「さあ、創立15周年記念式典だ！ゆつくり行くか！」

創立15周年記念式典。それが終わったあと、すぐに謎山の登山開始地点にたった。

「いよいよ——か。」

24日の努力——は、薄いものだったが、遂にその1歩を踏み入れた。

この山を登る方法は分からないが、最初の2000メートル付近までは、簡単な道である。もちろん体力は奪われるが、それでもまだまだしな方だった。

「ふうういー。大変——。」

私が2000メートル付近についたのは、午後4時だった。

「さて、あと800メートル。頑張ろう！」

私は、あと4時間あるが、ここからが難所だらけなため、行けるところは急いでいった。

「お、難所1つめだ！」

難所1つめ、ロッククライミング出来そうな坂である。

「うわあ、この坂辛すぎない?」

角度は60度程であるが、道がごちゃごちゃである。

「ふう、まあ、ここを越えれば難所1はクリアつと！」

実は、難所の中でも簡単である。私は、この難所を30分ほどでクリアした。

「まずいなー。今2200メートル付近だけど、あと600メートルを3時間30分。厳しい。」

難所2、走って30分、恐怖の一本道。

「来た来た。難所2だ。一旦奥の山に行つてからこつちに戻らなきやいけないのに、その橋が怖いんだよな。」

もちろん、橋から落ちたら別世界行きという結果になる。死亡例も多く、危険な場所だった。

「さあ、行こう！」

その難所を1歩1歩確実に歩いた。時間は1時間程でクリアした。現在2500メートル付近。あと2時間半。

「次は——あれか。」

難所3、蛇が出るとされている危険な地帯。

「学校での話にあったところか。ここの蛇、確か見られた瞬間毒を吐かれ、3日でバイバイするんだっけ。」

ここでも死亡例は出ている。いや、ここの方が多。蛇は3匹程とされている。

「あつちの500メートル先がゴールか。コツは——足音をたてないことかな。」

よいい、スタート!という瞬間に静かに歩いた。

。静かに、静かに——

何も音をたてずに歩ききった。蛇のシャー!つて声はしたが、たまに遠かったのか、現れはしなかった。

「オツケー。じゃあ、次！」

更に歩いていく。そしたら、いかにも厳しそうな場所があつた。
「なんだここは?!?!」

難所4!ラスドの難所。崖を渡れ!既に時間は午後7時30分、腕時計を持ってきて正解だった。

「この崖、30メートルといったところだろうか。でも、綱渡りのロープより危険そうだよ！」

ここは人々の間で、悪魔の崖渡りと呼ばれていて、ここを抜けた先にあの光が見えるとされている。

「ふう、もう、後戻りは出来ないな。」

最後の難所に足を踏み入れる。

「よつと！うわあ、めつき揺れるわ——。」

ここから2750メートル下が微かに見える。建物が蟻よりも小さく、人は全く見えない。それが2750メートルの世界だった。

「あつと！危ない危ない。」

その頃、満月が登り始めていた。

「綺麗だ——。」

感無量。久々に月を見た感覚だ。約束の時間まで、後5分。残り2メートル程だった。

「はあ、はあ、た、体力が——！」

しのぎを削る限界の勝負。私は、それを乗り越えた。頂上まで、5メートルの坂を登るだけだった。

「来た——遂にゴールだ——！」

腕時計は、午後7時59分を指している。

「これで、光らなかつたら、もうここから飛び降りよう。」

それくらい過酷な山登りだった。そして、遂にそのときは来た。定刻。

「——午後8時。頂上付近で光は——。」

真後ろに、太陽よりも輝かしい光が指している。美しさに声も出さず、反射的にそつちの方に移動していった。

「ここか——この光の本当の正体は——！」

そこに光っていたのは、時空の歪みから発生する光だった。

「ん？誰か立ってるぞ！」

そこには、背が165センチ程の女性が1人、しっかりと背を伸ばし立っていた。

「あの一、スミマセン。この光はなんですか——？」

「おおお！人がいる?!?!あ、こちらは、幻想郷への入り口の扉となっております。」

「ここに来るのって珍しいんですか？」

「実はですね、こちらの光の扉、ごくまれにこちらの世界のこの場所にやってくるんです。」

「でも、あなたは何故ここに？」

「そのときに、私だけ送り込まれるんです。が、100日に1回あるかないかです。」

「へえー。で、人が来たって騒いでたけど、それって珍しいことなんですか？」

「はい、実に——350年ぶりですかね——。」

「へえー？ええええええ!?!350年!？」

「はい、イヤー、驚きました！」

「それは、驚きますよね。」

「残り時間が後2分少々になりました。幻想郷は、人が入るとやられる危険の高い場所です。それでも、あなたはこの光の扉に入りますか？」

「もちろん、入るに決まっています。」

「この扉に入ってから、しばらく進むと、管理人がいます。」

「管理人——。」

「はい、その方があなたに与える使命を言い渡されます。」

「なるほど。」

「その方の使命をクリアしたら、あなたはこの世界に戻れますが——
—使命は決して簡単ではありません。」

「了解です。」

「残り時間が30秒になりました。では、覚悟が決まったら、御入りくださいませ——。」

「もう、覚悟は決まっていますよ。重度のオタクとして、入らない訳にはいきませんからね！」

私は、迷わず、素早くその扉を開けて、光の中に入っていった。

「ふう、ここから歩けばいいのか。この先、どんな試練が待ち構えているのか——そんなのはわからないけどね。」

後ろから、さっきの女性がやって来た。

「あー、こちらでございませう。」

その人に続いて、一歩ずつ歩いていった。

「この先でしたっけ？」

「はい、もうそろそろ見えますよ！」

そこから1分程で、目の前に現れた受付。3人の人らしいけどちよつと違うものが、座っていた。

「幻想郷受け付けになります——つて。お客様久しぶりじゃないですか!!!」

「350年ぶりでしたっけ？」

受付の人もざわめく。

「ええつと、自分の使命ってなんですか？」

「それは、あなたの趣味で決まります。」

「え、私の趣味？」

迷わずこう答える。

「オタク系アニメを見ること！」

「なるほど。アニメのキャラはどのくらい知ってますか？」

「まあまあ知ってるかなー？だいたい20種類位のアニメは見てますよ。キャラは数えきれないので省きます。」

「では、あなたは——。幻想郷を支配して、アニメキャラたくさん連れ込み、カオスな町にすることです！」

「——え？」

まず最初に思ったのは、この人、頭大丈夫なのか!?つていうことであつた。誰もが思うことであろう。

「では、私は、幻想郷を支配するのですか？」

「はいー！」

「えええ。困ったなー。私にそんな力があるのかな——？」

心が折れかけたが、やるしかなかった。ここは幻想郷受付。幻想郷の世界は、すぐそこだ！ 終

Stage 2. 伸び伸びしている幻想郷。今は亡き
ウィズスキルターとは!?

能力を決められた私は、あっさりと幻想郷の世界に投げ込まれることになってしまった。

「んっんー。ここは、どこだ? そうか、ここが幻想郷か——。」

気付いたときには幻想郷の世界に入ってしまった。

「幻想郷、なんだか田舎町っぽい——。まるで自分の町のようなー。」

訳がわからない状態だったが、近くに博麗神社という神社があったため、そこにいつてみることにした。

「博麗——神社? なんだろう。ここは——。」

自分の田舎町にはない神社、そんな和風な場所にうっとりしていたのだった。

「へえー、意外と大きな鳥居が1つ、奥に見えるは神社って感じかな?」

しばらくそこにいたら、ある人がやって来た。

「あんた? 誰?」

「私は、タケノコ委員長ですよ。」

「ねえ、まさか、あんたはさ、あっちの世界の謎山から入った人!」

「あれ? 知ってるなら話が早いですね!」

「うわあ、こんな感じなのか。」

「な、何かあるのですか?」

「350年前、前にも謎山から幻想入りした人がいてね——その人は残念ながら1日で敵にやられたんだけどね。」

「ということは、私も1日で?」

「あんたはおそらく違う。」

「え?」

「あんた、幻想郷を支配しに来たって顔だね。」

「なんで、それが?」

「なんとなくそんな顔してるからだよ。まあ、理由とかあるでしょ?」
「実は、元の世界に帰るには、ある条件を成り立たせなきゃいけない
——。」

「条件があるのね。で、その条件ってのは?」

「幻想郷を支配して、ここをカオスにしている間だけ元の世界に帰れる
とか——。」

「ふうん、なんだ、そんな理由だったんだね。」

「なんか、変な理由で申し訳ないです。」

「まあ、幻想郷支配って、簡単じゃないからね。」

「それは理解しますよ——。」

「今幻想郷を本格的にドンツと支配してる奴はいないし、今がチャン
スじゃない?あ、私は博麗霊夢。」

「でも、どうやって——。」

「どうやってって言われても、私にはわからないよー。異変解決の為
なら、1日くらいは支配しても良いんじゃない?」

「にや!?良いんですか?」

「今は無理。しばらく頑張って生き延びて——。」

「なるほど。了解です!」

霊夢は、異変解決が仕事である。だからこそ自分を元の世界に追
出そうとしてるのだろう。

「それにしても、どうやってカオスにすればいいんだよ——アニメ
キャラってどうやって連れ込むんだ?」

しばらく考えてみたが、結局何も思い浮かばなかった。

「あー、もう分からんよ!!!くっそー!!!って言っても、謎山に好んで入っ
たのは自分だし、しっかりとやり遂げなきゃな——!」

何でもポジティブに捉えるのが重要と思い、ネガティブには考えな
かった。

「自分が時空を操れたらなー。」

そのとき、脳内に電子音みたいな者が聞こえた。

「あなたの能力は、時空を操れる能力で確定します。よろしいでしょ
うか?」

「え? どういうこと? ちょっと待って。しばらく考えさせて!」

「本日中に決めないと能力は与えられなくなります。お急ぎください。」

「なんなんだ? 今のは?」

いきなり変な電子音が流れて、戸惑っている。

「もしかして、今日なら1つだけ能力が与えられるとか!? それって何でもできるんじゃない? たとえ強い能力でも、弱い能力でもさー!」

やはり残念な発想力だ。こんな発想力で勘が鋭いなどあり得ない。

「フッフ、ハハハハハハ!!」

危険な町でもある幻想郷、そこに生まれた試練の解決法は、なかなか見つからないものではあった。

「少し、幻想郷探検しよう。何か見つかるかもしれないからな。」

「幻想郷。謎山の中で最も謎な光の通り道なのかな——。今頃生徒達は寝てるだろうな。」

妄想をしているうちに、日が変わりそうになった。

「やっべ、能力! じゃあ、やっぱり最初に思い付いた奴にしようかな?」

本当にそれでいいのか迷ったあと、電子音が流れた。

「あなたの能力は、時空を操れる能力で確定します。よろしいでしょうか?」

「はい。」

「では、明日中に幻想郷に入って最初にみた建物の前に来てください。」

「最初の建物? あー、博麗神社のことか。」

「そこであなたに能力を授けます。」

「はいー!」

もちろん、心のなかでは嬉しかった——が、時空を操るってことは、——。

「俺は、元の世界と今の世界、行ったり来たりする事出きるんじゃない??? あれ? これは圧倒的おけるテクノロジーじゃねーかよ!」

上の圧倒的おけるテクノロジー、知らない方ご免なさいw

「さて、決め台詞圧倒的おけまるテクノロジー言ったところで、明日中にまた博麗神社に行くか！」

翌日、神社にて――。

「ここだ――幻想郷で最初に見たところ。最初に見た神社！」

そこでまた、電子音が流れる。

「ここで今からあなたに能力を授けます。但し、この能力であなたの家に帰ることは、目的を達するまで不可能とします。」

「え――。」

世の中そんなに甘くない。

「うわあ、それは渋い!!！」

「それでは、最後の確認です。あなたの能力は、時空を操れる能力で確定します。よろしいでしょうか？」

「最後の確認なんて必要ない!!もちろんその能力がほしい！」

「かしこまりました。」

空から光が降ってくる。

「のわあ！」

当然、その光は私向けの光だった。

「うわあ、これで幻想郷だけでなく、すべての町の時空を操れることが出来るのか――!!！」

「あなたに能力を授けました。この能力の有効期限は無限となっております。」

「お、しかも無限だってーアハハ！勝ち組だな!!！」

そうして、しばらくたって、暇になった霊夢がやって来た。

「ふう、やっと暇な時間がとれた。けど紅魔館に寄るの忘れたー。はあーあ、面倒！」

「ちよつと待っててくださいいね！」

「こういうときこそ能力の使い道だ。」

「時空移動！紅魔館!!！」

赤と黄色が混ざる世界。そこに一歩足を踏み入れたら――。

「紅魔館!?!ちよ、どうなってるの!?!」

「自分の能力です！」

「へえ、では、私は戻りますので。」

「あ、はあ。」

「時空移動！博麗神社！」

「またもや赤と黄色が混ざる世界に足を踏み入れる。そこは——

「おっけー！博麗神社到達！アハハ！この能力面白すぎ！」

「能力で遊んでいた私には、後でバチが当たるだろう。まあ、重度のオタクの私にとって、そんなことは気にはしていなかったのだ——

！

「それにしてもつまらないな。鷹とかいないかな？鷹狩りでもしてみたいのに——。」

「鷹狩りなんて普通やることやら——。」

「ギンヤンマでも捕まえようかな？」

「ギンヤンマ、大体の人が数年ぶりに聞いただろう。そこへ、霧雨魔理沙という魔法使いがやって来た。

「はあーあ、暇だー。お、あそこに誰かいるぞ！ちよいぶっ倒して見るか！」

「魔理沙は勝負が好きだ。すぐに攻めてくる。」

「おー！その人間！俺と勝負だ！」

「え？勝負？あ、まあ、良いですよ。よく分かりませんが——。」

「よっしゃ！覚悟！マスタースパーク！」

「うわあ！」

「ギリギリのところ、ある凄い策を思い浮かべた。」

「時空の歪みを発生させて——！」

「時空の歪み？」

「君の後ろにマスタースパークってやつを持ってくる！」

「なんだと!？」

「あ、意外と効いたぞ!!!あの魔法使い、格好つけてる割には弱いな。」

「それはどうかかな？」

「物理攻撃か!？」

「やあああ!!!」

「わあっ！ぶふっ！」

「魔法使いの一撃、なかなかでかいな……。かなりのダメージを負ってしまった。——くっ、どうすればいいんだ!？」

「あんた、そもそもどっから来たんだ!？」

「ええっと、謎山——。」

「謎山?どっかで聞いたような——いや、どっかで見たような——。」

「え?」

「あー!思い出した!パチエの本だ!」

「パチエ?パフェみたいで美味しそうな名前——!」

「凄い魔法使いなんだぞ!!」

「ふうん。」

「パチエの本に載ってたぜ。謎山のこと。あいつなら色々知ってるはずだぜ!」

「で、そのパチエって奴はどこに?」

「あいつは紅魔館にいるぜ。」

「紅魔館!霊夢が言ってたところか。」

「なんだ?紅魔館について知ってたのか?」

「ちよっと前に見ましたよ。一瞬だけ——。」

「なら話が早そうだな!」

「——?」

「紅魔館に来い!」

「え?」

「よっしゃ!じゃあスピード勝負だ!!」

「また勝負ですか?」

「いくぞ!よいい、スタート!」

「時空の歪み発生!紅魔館に連れていけ!」

「はあ?その能力、反則だぜ!」

「なら、一緒に入りなよ!」

「お?マジか?サンキュー!」

「こうして、再び紅魔館に行くことになった。

「はい、到着!」

「よいしょつと！その能力便利だなー。羨ましいぜ！」

「さて、ここは紅魔館の入り口かな？」

「ああ、その門番野郎、なかなか通してくれないんだよな！」
「時空の歪み発生！紅魔館内へ!!!」

「お、なるほど、通り抜けるってことか！」

「さあさあ、入って！」

「おう！」

そこにいたのは、霊夢だった。

「あれ？あんたたち、どうしてここに？ていうか魔理沙!!!」

「え？」

「あんたねえ、パチエがぶちギレてたよ！今すぐ本返して謝らなかつたら体が1000個に別れてしまうぞー！」

「ええ、やだよ！これから謎山についての本を借りるんだから——
！」

「本だつてただじゃないんだけど、私も今からそれを確認しようと思つたの。とりあえず魔理沙。」

「ん？」

「あんたがいると100%貸してもらえないから、あんたは引っ込んで！」

「えええ。分かつたよ。しやーねーな！」

「何よその言い方！退治されたいってわけなの？」

「そんなわけじゃねーよ！」

「じゃあ何よ？」

「ふん、俺も行かせなきやこいつがどうなるのかわかるよな!？」

「え？わたし？ちよ、止めてくださいよ!!!」

「あんた！まさか人質をとるつもり？」

「時空移動！魔理沙を博麗神社に！」

「おおっと、そうはさせないぜ！」

「安心しなよ！この能力、逃げられないから。」

「なんだと？うわあ！」

魔理沙は、あつという間に博麗神社に飛ばされた。

「はい、お掃除完了！」

「さて、本借りてくるか。」

「あら、霊夢。」

「咲夜じゃん。こんなところで何してるの？」

「いつものように、お嬢様の見張りですよ。」

「大変ねー。」

「ところで、そこにいるのは？」

「タケノコって呼んでください！」

「よろしくねー。」

「今からパチエに本を借りるの。」

「あんたが？ 魔理沙は見かけるけど、あんたが来るのは珍しいわね——」。

「まあ、色々あつてね。けっこう大きな異変を解決しないといけないんだ。」

「まさか、それが彼のこと？」

「そう。今幻想郷でかなり話題になつてる謎山。彼はその謎山からやって来たんだ。」

「へえ、350年ぶりだっけ？」

「やっぱり知つてたのね。今のところ知らないのは魔理沙だけよ。」

「まあ、新たな技の練習ばかりですからね。」

「本当よ。」

「で、彼が何かやらかしたんですか？」

「謎山に入つて、彼に試練が与えられたらしいんだ。それが、幻想郷を支配し、ここを力オスにする事。」

「面白い試練ね。」

「大変よ。」

「まあ、支配するつてのに反対しそうな方はたくさんいそうですね。」

「それよー。彼1人に任せても——あ、そういえば。」

「ん？ なんかヒラメキました？」

「ねえ、あんたさ、時空を操れるんでしょ？」

「え？ あー、はい。」

「だったらそれであつちの世界に戻ればオツケーなんじゃない?」

「それが、試練達成まで元の世界に戻れないんですよね。」

「なにそれ?」

「そういう設定みたいなんですよ——。」

「まあ、それならしようがないわね——。」

「なんか設定悪くて申し訳ないです——。」

「設定なんて甘くはないものよ。もし設定について文句を言うなら、これ作ってる本人に言えば良いじゃないの!」

「それもそうですね——。」

あ、あれ?こんな展開予想してないぞー?おまずいなーおまずいなー。どうしよっかなー?

「まあ、そんなことより早く本を借りよう!」

一気にパチキュリーの部屋まで行った。

「失礼します。」

「失礼しますにやー。」

「あら、霊夢。と——だれ?」

「なんか幻想入りしたタケノコ委員長って人。謎山って知ってる?」

「え?いきなり謎山?」

「うん。いきなりなんだけど、彼、謎山から幻想入りしたんだって。」

「352年前の事件、知ってる?」

「352年前なんて知るわけないわ。」

「352年前、謎山から入ったウイズスキルターって人。彼、入った瞬間やられたんだよ。」

「入った瞬間?ウイズスキルターが弱いだけではなくて?」

「ウイズスキルターは強かった。おそらく霊夢。あんたよりも強かったわ。でも、幻想郷の環境に慣れずに死んでしまう人がいるの——。」

「——。」

「どんな人——?」

「25歳以上の人は大体アウト。ねえ、あんた何歳?」

「16です。」

「16ね。」

私の本当の年齢ではなく、設定上決められた年齢だ。そこは間違えないで欲しい（〜〜）

「ところで、ウイズストキルターってどんな能力を——？」

「それは分からない——その能力を見た奴は、皆いなくなってしまうから——」。

「352年前ならそうなるか——」。

「ウイズストキルター、なんで1日でやられたんだろう——」。

「2つの説があるの。1つめに、彼がここまで来るのにそうとうな体力を使い、限界が来てしまった。」

「もしそれなら、自分は安全ですね——。既に入れましたし——いや、入ってしまいましたし——」。

「うん。でも、その説は有力が有力じゃないかっていうと、有力ではないわね。」

「では、2つめ——」。

「誰かが攻撃した。そして彼はやられた。これがもつともな案になるはず。」

「——。それだと危ないな——」。

「パチュリー様。この本どうすれば良いですか——？」

小悪魔がいた。

「ああ、ごめんごめん。1つ1つ片付けていってくれる？」

「了解です——」。

「彼女は？」

「小悪魔よ。」

「悪魔？」

「安心して、襲うってことはしないよ。」

「——」。

何も話せなかった。悪魔なのに人を襲わない時点でおかしいと思っただ。

「優しい小悪魔だな——」。

心の中で思い、小声で話した。

「ウイズストキルター。彼は幻想郷で何をしたかったのかな。」

「ん？待てよ？ウイズストキルターって——。」

「何か聞き覚えでも？」

「ウイズストキルターって人は本当に謎山から幻想入りしたんですよ？」

「それは間違いないと思うけど——？」

「ならば、あの先生が言ってた通りだ。」

「え？」

「ウチの担任の先生、ウイズストキルターについて少しだけ知ってたんですよ。」

「まさか、あっちの世界にも知ってる人が!？」

「彼は大分前に謎山に登ったんだけど、何か光が射してドンツ！っていう爆発音が聞こえて、それからというものの行方不明なんだとさ——。ってことを前に話してました。」

「爆発音はおそらく幻想入りする瞬間に起こる時空の歪みかな。で、あっちの世界でも彼はもういないのではないかと考えているの？」

「はい。」

「その判断は正解ね。」

「やっぱり——ですか。」

「うん。」

「彼はどんなことを。まあ、それは気にせず。謎山についての本は——。」

「ああ、待ってね。今全部持ってくるから——。」

「お願いしまーす。」

パチュリーは謎山についての分厚い本を5冊持ってきた。

「ええっと、簡単に説明するね。」

「ぶ、分厚い。」

「当たり前よ。まず、下から。下が謎山についての謎を解明した本。」

「それが、この一冊に——。」

「で、下から2番目のやつがウイズストキルターについての本。」

「あとの3つは——？」

「真ん中は時空の歪みについての本。」

「で、あとの2つは幻想郷についての本よ。まあ、幻想郷について知りたいならこの本も持っていきな。すぐに返すなら。もう一度言うよ。すぐに返すなら!」

「あ、了解です。ありがとうございます!」

こうして、すぐに返すことを前提に5冊の本を借りた。

「これ、何キロあるんだ——?」

おおよそ15キロである。

「こういうときに便利なのが時空の歪みを発生させる事!」

そういう勢いで一気に時空を操り、博麗神社まで戻った。

「ふう、こうはいうものの、どれから手をつけたら良いのやら——流石に5冊を一気に読むのは厳しいからなく。」

そんなときに、氷の妖精と緑の妖精がやって来た。

「あたいはチルノ!おい!そこのお前、誰だか分からないが勝負だ!」

「やめようよ!。チルノちゃん。あいつが強かったらどうするの?」

「あたいは最強だから大丈夫!」

「時空の歪み発生、彼女らを紅魔館前まで!」

「え——?うわああああ!!!助けてー!!!」

「チルノちゃん!!つて、うわああああ!!!」

「ふう、なんなんだ!?!いまのはあ!?!」

よく分からない敵みたいな妖精に襲われても、能力はいつでも使えることが出来る。

「ふう、氷を操れるのかな——?まあ、とりあえず時空操ればなんでも出来るんじゃない!?!」

そう考えた私は、とりあえず時空を操ってみることにした。

「自分の家からケーキ出して!」

ポンツ!

実は、家にケーキを置いておいたのだ。そのケーキが勿体無いと思っ
い持ってきた。

「アハハ!楽しいな!さあ、もっともっと行くよっ!」

「ねえ、能力使うのは良いけど、悪戯しようとはしてないよね?」

「はい、勿論ですよ!ケーキを持ってきただけです。」

「そのケーキ、美味しそうね。」

「あ、あ、——あげませんよ!」

「一口——!」

「えええ、分かりましたよ。一口だけですよ!」

「やったあ!」

「はあーあ、早くこの本読まなきゃなー。」

1分くらいして、霊夢が話しかけてきた。

「うん、美味しかった!」

「でしょでしょー?——つて、全部食べちゃったああ!!それ、俺のケーキなのに!」

「別に良いじゃん!とりあえず、その本なんて書いてあるの?」

「——時空の歪み発生、彼女を紅魔館ま。」

「させないっ!!」

「えっ?」

霊夢は何故か攻撃体制だった。

「なぜに攻撃体制なんですか!?!」

「あんた、私に何しようとした!?!」

「いや、それは——気のせいですよ!だ、大丈夫です!」

「私を紅魔館前に投げようとしたわね!」

「そんなことしませんよ。」

「これ見て、霊符つてもものよ。これであんたに何をするかは私の自由。さあ、私を無理矢理紅魔館へ連れていくか、それとも謝るか選んでい

いよ。」

「え?イヤー。」

「今すぐ退治されたいってわけ?」

「いや、そんなわけでは——。」

「なら謝ってもらおうかしら——?」

「うっ!」

「さあ、早く!!!」

「————。」

「いっ?」

「午後3時のおやつケーキがああああああ!!!」

「」。

「」。

「夢想封印。」

「うわああああああ!!!」

霊夢はおふぎけが嫌いなようだ。

ボンツ

「いててててて——ここは？」

「あんたの勉強場所よ。そこでおとなしくパチエから貰った本読んでなさい！」

「あ、はい——。」

ガチの霊夢は中途半端な能力では倒せない。

「ふういー。さて、本でも読むか。」

まずは、ウイズストキルターについての本を取り出した。

「ウイズストキルター。彼は謎山からやって来たと言われる謎だらけの存在。彼については謎だらけだ。」

そこで普通はこう思う。

「謎だらけでよくこんなに分厚い本作れるな！」

その続きも見てみた。

「中には女性説、本当は今も生きてる説、幻想郷の支配者説、最も有力なのが、彼は実在してない説がある。」

やはり、彼については謎だらけのようだ。

「そもそも、彼は女性なのか。おそらく答えは？である。ウイズストキルターを書いたと言われる唯一の絵からして、女性には思えない。」

そこには、絵が書いてあった。

「ふうん。これなら男性だよな！」

そこにもこう書いてあった。

「この絵は、とても高級な筆を使っているように見えるが、大分前にこの筆があるかは分からない。おそらくない。従って、これは誰かが勝手に書いた絵とされるのではないかと考えられる。」

単なる偽物の話題だったのかよって思ったが、更にこう書いてあつ

た。

「この絵からして、彼は重症に至るまでの攻撃は受けてないように見える。その為、彼が死んでるとはとても思えない。」

ふうん。もういいや。次の本に行こうって思った。まだまだ幻想郷は謎だらけ。そんな世界に足を踏み入れたからには、役目は果たすだけなのである。 終